

群 教 セ	F09 - 01
	平 16.218集

不登校児への校内支援体制の研究

－ 円環的な問題解決のチーム支援を取り入れて －

長期研修員 大工原 さゆり
指導主事 川 田 恵美子

《研究の概要》

本研究は、県内の中学校をフィールドとする不登校児の学校復帰や自立を目指す機能的な校内支援体制モデルの開発である。不登校児にかかわるチームを編成し、組織的、計画的な不登校児への支援により、円環的な問題解決のシステムを構築することができた。

システム内の支援者が、不登校児や保護者、協働する支援者たちと常に相互コミュニケーションを図ることによって、効果的に機能する校内支援体制モデルを提言する。

【キーワード：教育相談、チーム支援、問題解決、相互コミュニケーション、校内支援、コーディネーター】

研究の問い

不登校児童生徒の数は、平成15年度は、126,212人で前年度より5,040人減少が見られている。群馬県においても、平成15年度の不登校児童生徒数は1,869人で前年度より56人減少している。しかし、まだ多くの不登校児童生徒やその保護者は、今の状況から脱したいと願っており、依然として大きな教育課題である。

今まで不登校問題が長期化している原因の一つに、学校では、反社会的な生徒指導に関わる問題が優先され、非社会的な不登校問題への対応が後回しになってしまっていたり、担任一人が背負ってしまったりしているからではないかと考える。また、現在不登校の要因や背景が多様化・複雑化していることから、「どのように学校で対応していったらよいか」が明確でないことも不登校問題に積極的に取り組めない原因であると考えられる。

平成16年3月に発行された群馬県総合教育センター「不登校問題課題解決支援資料」には、「不登校問題は、関係の中で生じる問題」と捉え、「問題解決の学校風土を創ることが不登校問題の解決につながる」と提言されている。この提言は「不登校問題を今までの原因追求の考え方ではなく、不登校児と学校や家庭でかかわる人との関係の中で生じている問題」と捉えることが、不登校児の支援に重要であるとしている。この提言を受けて、学校で実際に不登校問題を考えるときに、次のような点が不登校児の支援者にとっての課題になると考える。

第一に、不登校児にかかわる人たちが、学校や家庭の中で不登校問題を「関係の中で生じる問題」と共通理解し、自分の問題として捉え、支援を考えることが必要になる。

第二に、「不登校児童生徒の支援を行う時には、児童生徒にかかわる情報をつなぐことが大切である。」とあるが、日々忙しい学校の中で、不登校児の情報をつなぎ、支援を考えることが必要になる。

第三に、「情報をつなぐキーパーソンとして、コーディネーターの存在が重要である。」とあるが、コーディネーターの役割を理解し、担うことが必要になる。

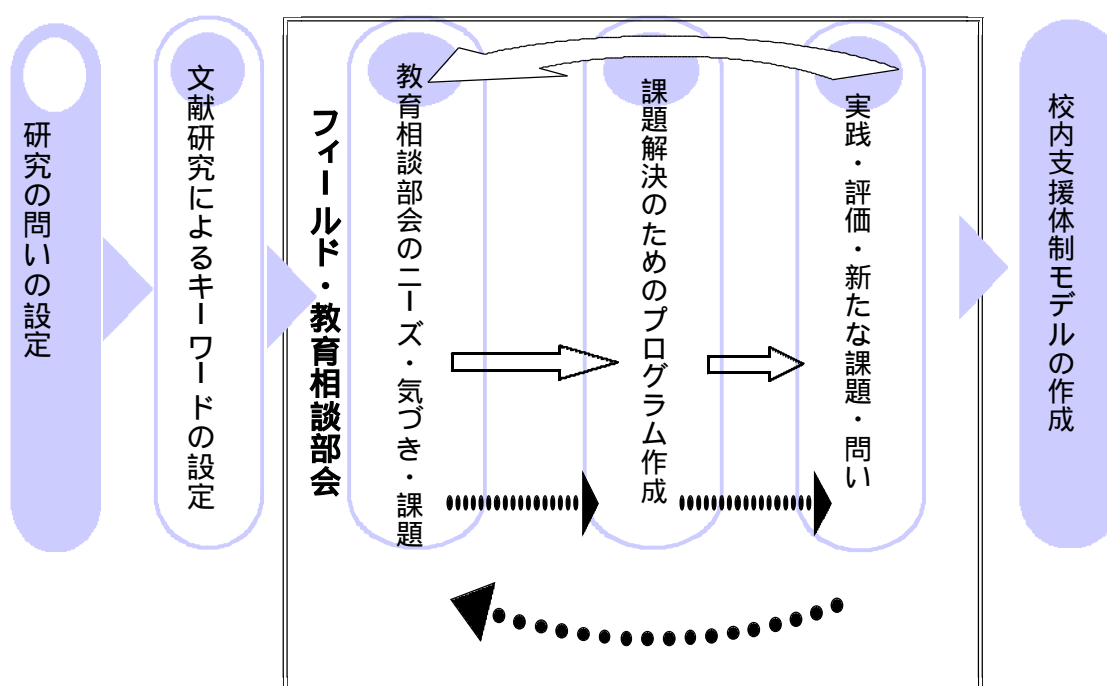
このような支援者の課題がある中で、本年度不登校生徒への支援を教育相談部会という組織で考えていこうとする中学校において、研究の機会を得ることになった。この中学校の地域では、

適応指導教室がなく、不登校児や保護者にとって学校からの支援の必要性が強く求められている。そこで、「不登校問題課題解決資料」の提言をもとにした校内支援の実践とそこでの学びから、円環的な問題解決のチーム支援を取り入れた校内支援体制モデルを作成し、不登校問題の解決に寄与したいと考えた。そして、まず次の点を研究の問いとした。

学校全体で不登校児へ支援をするには、どのような取組が必要か。
不登校児の思いや情報を共有するにはどうしたらいいのか。
コーディネーターは、どんな役割を担うのか。

研究の手順

本研究は、フィールドワークを通じた研究により校内支援体制のモデルを構築したいと考え、「モデル構成的質的研究の手順」(奥山・懸川 2004)を参考にした。



研究のキーワードの設定

学校内・家庭・外部機関との連携を含めた「校内支援体制」
不登校児への効果的な「チーム支援」
学校内・家庭・外部機関との連携を図る「コーディネーター」

フィールドからの学び

1 フィールドの概要

A中学校は、生徒数約500名、教職員数約45名の中学校である。5月の段階で不登校児は、1年生1名(小学校より不登校)、2年生2名(中学校1年より不登校)、3年生1名(中学校1年より不登校)である。現在登校渋りまたは今後不登校が心配される生徒が、各学年数名ずつ

いる。今年度スクールカウンセラー（毎週金曜日に勤務、以後ＳＣと記す）と相談員（月曜日と水曜日の週２回勤務）が配置されている。Ａ中学校では、前年度の教育課程の反省から今年度より教育相談部会の組織で、不登校児の支援を考えていくことにした。教育相談部会は、月１回ＳＣの勤務日である第２金曜日の４時以降に設定し、参加者は、基本的に学校長、教頭、各学年の教育相談担当、養護教諭、ＳＣ、相談員とした。

２ フィールドからの見取りと学び

(1) 教育相談部会の実践からの見取り

第一回教育相談部会では、学校長の方から群馬県総合教育センター「不登校問題課題解決支援資料」をもとに「不登校生徒への支援をチームで行っていこう」ということが提案された。そして、ＳＣから現在不登校児についてみんなで共通理解し、支援を考えていくために「援助シート」（石隈・田村式援助シート標準版）が提案された。
第二・三回の教育相談部会では、前回提案された援助シートを基に不登校生徒を理解し、支援について話し合いが行われた。

気づきや課題

気づき 課題

それぞれが生徒に一生懸命かかわっている。
それぞれのかかわりが、共通の目標にむかったものでないと支援の効果が上がりにくい。

【課題解決のためのプログラムＡ】

情報をつないで生徒への支援を考える

教育相談部会

課題

話し合いを進めるキーパーソンが必要であり、その役割が重要になる。
話し合いが活発に行われ、不登校児への理解が深まり、支援も多様に考えることができるが、１つの事例に時間がかかり、月１回の部会では全ての不登校児について考えるのは難しい。

【課題解決のためのプログラムＢ】

生徒へかかわれる人でチームを組んで支援を考える

教育相談部会

課題

チームによっては、情報交換や支援の共通目標を決めたり、具体的な支援案を考えるチーム支援会議の時間がとれなかった。
ＳＣや相談員、養護教諭から、人間関係に悩んでいて今後不登校になることが心配される生徒について報告があった。

【課題解決のためのプログラムC】

効果的なチーム支援を考える

教育相談部会

課題

チームの構成メンバーが自分の支援を振り返ったり、各チーム支援の課題を確認したりして、改善案を出し合い、より一層チーム支援の効果を高める必要がある。

【課題解決のためのプログラムD】

支援を振り返り、今後の支援を考える

(2) 課題解決のためのプログラム

【課題解決のためのプログラムA】

「情報をつないで生徒への支援を考える」

主なねらい

- ・ 様々な立場の人で情報を出し合い、つなぐことを体験し、不登校児を背景から理解する。
- ・ 自分の立場でできる支援を考えることが、大切であることを知る。
- ・ ロールプレイを通して、支援者同士が相手の立場を理解する。

主な内容

- ・ 「不登校問題課題解決支援資料」のp 40のワークショップを参考に、2年生と3年生の不登校児への支援を考える。
- ・ 様々な人たちからの情報をつなぎ、不登校児の思いや状況を理解し、「自分にどんな支援ができるのか」という問題解決の思考を体験する。
- ・ 普段の自分と違う立場になって、支援を考える。

研究者の気づき

- ・ 情報を出し合い、みんなで支援を考えていくという協働意識が高まった。
- ・ 具体的な支援を考えていく中で、それぞれが生徒や保護者へのかかわりを振り返ることができた。
- ・ ワークショップ形式で、活発に情報を出し合い、生徒の思いや状態について自分がどう理解するかなど情報をつなぎ、生徒の理解を深めることができた。
- ・ 支援については、普段の自分と違う立場になって「どんな支援をするか」ロールプレイで考えることによって、それぞれの立場を理解することができたり、様々な支援案が出されたりしていた。
- ・ 参加者は、みんなで話し合うことによって、不登校児への理解を深められたり、支援の幅が広がったりするよさを感じていた。

キーワード

情報をつなぐ・相互コミュニケーション・問題解決の思考・生徒の理解を深める

【課題解決のためのプログラムB】

<p>「生徒へかかわれる人でチームを組んで支援を考える」</p>
<p>主なねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒へかかわれる人でチームを組み、そのチームを中心に生徒への支援をおこなっていく。
<p>主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育相談部会において、それぞれの不登校児への支援を話し合い、その支援に応じて、今の段階でどんな人たちがチームを組んで支援していくのかを検討する。 ・各チームに、情報をつなぐ役割としてコーディネーターをおく。 ・今後は、この教育相談部会に各チームのコーディネーターに参加してもらい、管理職、相談員やSC、養護教諭で月1回各チームの支援の情報の共有や今後のチームの支援方針を検討する。
<p>研究者の気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この部会に参加している人が、自分でかかわれる不登校児のチーム参加を積極的に発言していた。 ・この部会の参加者が、積極的にチームの一員になったり、コーディネーターを引き受けたりしていた。 ・不登校児へのチームを組むとき、支援の内容によって構成メンバーを考えることが大切である。 ・外部機関との連携が必要なチームに対して、管理職が窓口となってコーディネーターの役割を担うことになった。 ・養護教諭やSC、相談員は、どのチームにもかかわりたいという気持ちが強かった。 ・各チーム支援の課題が検討され、今後の各チームの支援の方向性が共通理解できた。 ・各チーム支援の情報を出し合うことで、支援を共通理解することができたり、それぞれのチーム支援の参考になるかかわりが出されたりした。
<p>キーワード</p> <p>チーム支援・コーディネーター・支援の内容とチームの構成メンバー・外部との連携</p>

【課題解決のためのプログラムC】

<p>「効果的なチーム支援を考える」</p>
<p>主なねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援をおこなっている時や支援後の不登校児の情報を把握することが大切であることを知る。 ・チームで共通の目標をもって支援することが大切であることを知る。
<p>主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各チーム支援の情報をコーディネーターが報告し、それについて、参加者が、今後どのように支援を考えていったらよいか検討していく。 ・不登校が今後心配される生徒の担任にも参加してもらい、支援を一緒に考えていく。
<p>研究者の気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターが積極的に生徒や保護者とかがわったり、チームのメンバーに声をかけ情報を集めたりしていた。 ・不登校になることが心配される生徒について、「どんな支援をしていくか」「どんな人でチームを組むか」などが積極的に話し合われた。そして、早期にチームを組んでの支援が

<p>考えられたので、その後、人間関係が改善される方向に向かい始めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各チームの支援の中で、情報交換が密にされているところは、生徒に寄り添った支援ができていた。 情報交換できないときは、コーディネーターが情報を集めたり、情報を発信したりして、つなぐことが大切である。また、コーディネーターは、チーム支援において、問題解決の雰囲気をつくるのが大切である。 コーディネーターがいることで外部との連携が密になる。 話し合いの回を増す事に、情報がつながり、問題解決の雰囲気が高まってきた。
<p>キーワード 共通の支援目標・問題解決・情報収集と発信・早期発見と対応・生徒に寄り添った支援</p>

〔課題解決のためのプログラムD〕

<p>「支援を振り返り、今後の支援を考える」</p>
<p>主なねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> 振り返りシートを使って、支援の振り返りをして、今後の支援をよりよいものにしていく。
<p>主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 各チーム支援にかかわった人たちが、自分の支援の振り返りやコーディネーターとしての振り返りをし、今後の課題を明らかにし、改善策を考えていく。
<p>研究者の気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> チームでやることによって支援者同士が支え合ったり、安心して支援できたりしている。 学校の教職員やSC・相談員が、チームを組み、組織的に支援をすることで、不登校児や保護者との信頼関係が強くなっていった。そして、自然に保護者もチームの一員としてかわりを一緒に考えるようになったところも見られた。 支援者が、情報交換を常に意識することが大切である。 みんなで話し合う回数が増す事に、問題解決しようとする協働意識が高まってきている。
<p>キーワード 振り返り・支援者同士の支え合い・保護者との連携・情報交換・協働意識</p>

(3) 実践からの学び

このように教育相談部会は、固定化したメンバーで行うのではなく、その都度ニーズや課題に応じて構成メンバーも換え、不登校児への支援のためによりよい方向を試行錯誤しながら運営していった。そして、この部会が「不登校児の対応を考える場」だけでなく、「不登校児へのかかわりの情報発信の場、早期発見・早期対応の場、外部との連携の場、チーム支援の評価と支援の検討の場」というように様々な機能をもつことになった。

管理職の参加が、協働意識を高める。

この部会に常に管理職もメンバーの一員として参加し、他のメンバーと同じ立場に立って、生徒の情報を出したり、自分で行う具体的な支援について積極的に意見を出したりしていた。管理職が、積極的に不登校問題を考えていこうとすることが、学校全体で不登校問題に取り組む協働意識を高める上で重要になると考える。

研修が大切である。

部会の中でそれぞれ自分の立場でできる支援を積極的に出し合えるようになったのは、「情報をつないで生徒への支援を考える」という研修を行った成果であると考えられる。この研修で体験したことをもとに常に部会で「生徒の情報を出し合い、つなぎ、自分で何ができる

か」を考える問題解決の思考過程を円環的に繰り返すことが、不登校児への効果的な支援につながったと考える。

問題解決の話し合いを繰り返すことで、生徒を背景から理解し、かかわりが変わる。

この問題解決の思考を繰り返すことにより、部会の話し合いが活発になり、情報がつながり、生徒を背景から理解するようになってきた。その結果、生徒へのかかわり方が変化し、生徒の些細な変化も把握できるようになってきたと考えられる。

コーディネーターの存在が必要である。

部会の話し合いでは、不登校児の状況報告に終わってしまわないように、常に問題解決の思考をもって支援を考えていくという雰囲気を作るキーパーソンとして「コーディネーター」の存在が必要になる。また、コーディネーターは、チーム支援会議や部会の記録をし、共通理解を図るための情報発信をすることも大切である。

(4) フィールドの事例からの学び

教育相談部会で、不登校の生徒や登校渋りの生徒について、「どのように支援していくか」それぞれが考えたり、「どんな人でチームを組むとよいか」を考えたりした。そして、それぞれのチームには、教育相談部会に参加したり、支援する生徒の情報やかかわる人をつなぐ役割を担うコーディネーター役をおいた。その後、月1回の教育相談部会に各チームのコーディネーターが参加し、管理職やSC・相談員・養護教諭が加わり、チーム支援の振り返りや今後の支援の検討を行った。そのチーム支援の事例から次のようなことを学びが得られた。

○立場の違う人たちが、チームを組んで不登校児を支援することが有効である。

- ・基本的にチームのメンバーは、担任とコーディネーター役を担う人と生徒の心理的理解の深い人が最低必要である。
- ・また、支援の目標に応じて、チーム支援のメンバーを変更していく必要がある。
- ・チーム支援で情報交換をする機会が増え、生徒の状況を把握し、共通理解のもとで支援の焦点を絞ってかかわれる。
- ・チーム支援を行うことによって、一人で判断に困る部分もアドバイスを受けたりするなどチームのメンバー同士が支え合い、生徒や保護者に自信をもつてかかわれる。
- ・チーム支援で行うと、メンバーがそれぞれの立場で支援し、生徒を多面的に理解し、支援することができる。特に、SCや相談員からの情報で、生徒や保護者の理解が深まる。

○保護者との信頼関係が重要である。

- ・保護者とは、担任だけでなく、SCや相談員やその他の学校関係者がかかわることで、学校との信頼関係が強まる。そして、その結果、保護者もチーム支援会議に加わり、生徒への支援を一緒に考えることができるようになり、生徒の動きにつながっていく。

○不登校児に寄り添った支援が大切である。

- ・生徒のペースに合わせて、少しずつステップアップしていく支援が効果的である。
- ・生徒への支援を考える時、社会的自立を目指しての長期的目標と当面の課題に対する短期的目標の2つが必要である。

○いつでもどこでも情報交換が大切である。

- ・休み時間に授業の様子や気になった生徒の情報を伝え合うことで、生徒へのかかわりがかわる。

○コーディネーターの役割が必要である。

- ・チーム会議がなくてもコーディネーターに生徒にかかわった時の様子を伝えておいたり、支援を行う前にコーディネーターから生徒に関する情報を得たりすることで、次の支援に活かすことができる。

- ・チーム支援が進むと次第に多くの人が生徒にかかわるようになるが、大勢になると支援について話し合う機会が持ちにくくなりがちなので、コーディネーターが、支援者へ共通の支援目標を流し、協働体制がとれるようにすることが大切である。

フィールドにおける学びから提示できるモデル

1 不登校児にかかわるチームを編成し、協働して支援を行うことが有効！

(1) チーム支援の有効性

不登校児にとって学校の教職員だけでなく、SCや相談員など立場の違う支援者が連携し、チームを編成するということは、それぞれの特性を生かして多様なかわりができる。そして、そのことによって不登校児や保護者との信頼関係が、様々な人と強くなり、動き出すことができるようになる。また、チームで行うよさは、児童生徒の担任を支えること、様々な立場から幅広い支援案が出されること、互いにアドバイスをすることが出来ることなどである。このように支援者同士でも支え合うことによって、互いに不登校児や保護者にかかわる時に、安心感をもって相手に寄り添ったかわりができると思う。

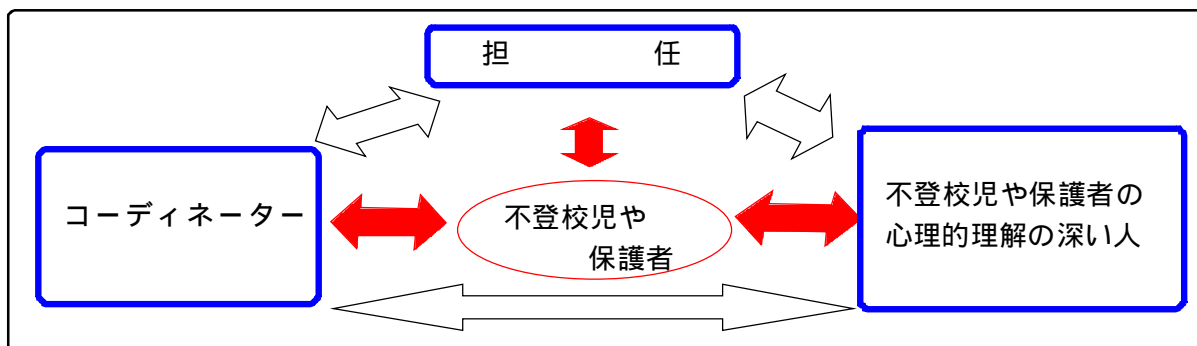
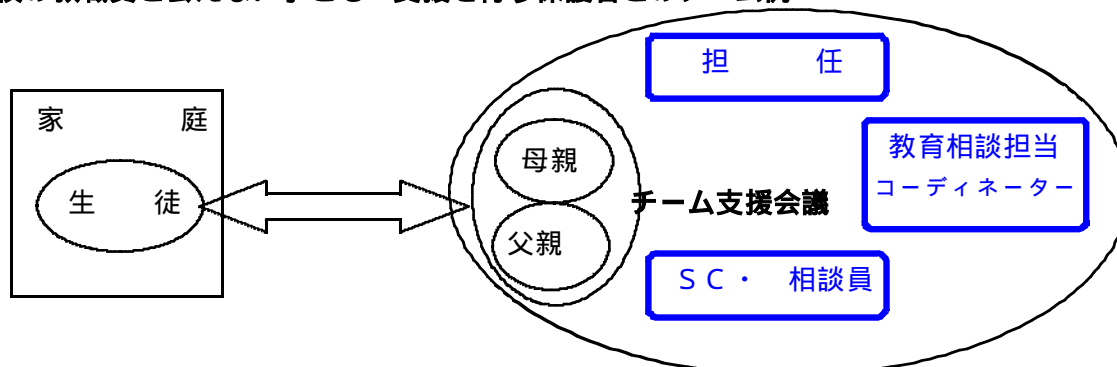


図1 チーム支援の基本的な組み方

そして、図1に示すような支援チームの組み方を基本にすることが有効であると思う。しかし、支援の内容によって以下に示すような支援チームが考えられる。

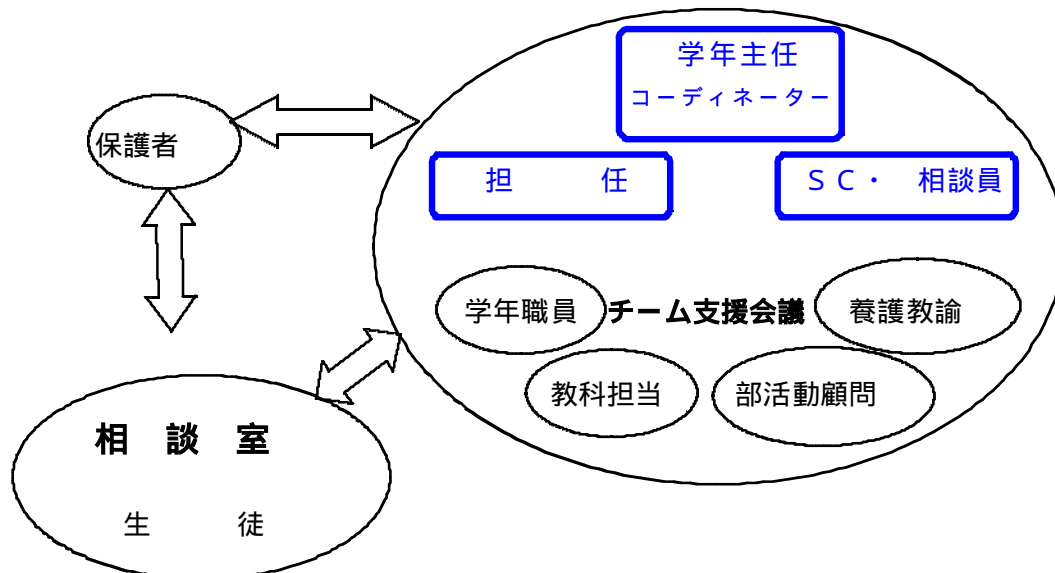
(2) チーム支援の例

○学校の教職員と会えない子どもへ支援を行う保護者とのチーム例



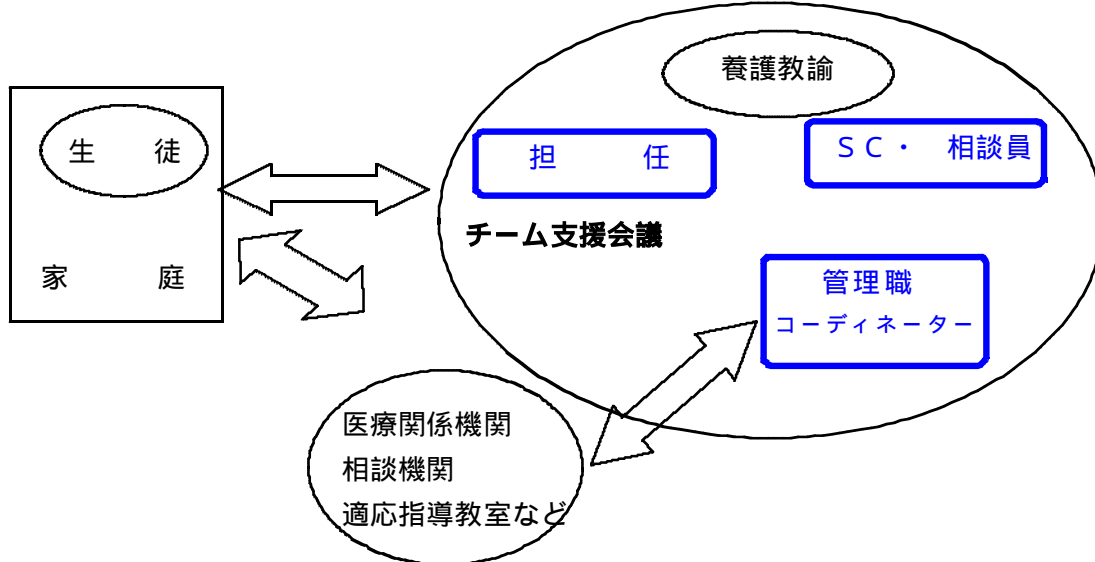
保護者と一緒にチームを組んで話し合う場合の留意点としては、学校の関係者はなるべく保護者との信頼関係が強い人にする。そして、少ない人数にする。また、SCや相談員などは、保護者の立場にたって話し合いに参加する。

○相談室登校をしている子どもへ支援を行う学年職員を中心としたチーム例



学年主任が、チームのメンバーそれぞれが行う支援やその時の子どもの反応についての情報を持ち、つなぐ「コーディネーター」の役割を果たす。
 学校全体の教職員に共通理解してほしいことや協働してほしいことなどについて、学年主任が打ち合わせなどで話す。
 保護者への対応は、主に担任だが、内容によって学年主任や管理職と一緒に教育相談を行ってもらうことも必要である。

○外部関係機関と連携を必要とする子どもへの支援を行うチーム例



管理職は、外部関係機関との連絡・調整を行う。そして、外部関係機関での支援や子どもの様子を情報として得た上で、「学校でどんな援助を行うか」チームで考える。
 また、外部関係機関と連携を行う際は、保護者に了解をとっておくことが大切である。

2 **子どもに寄り添った支援の共通目標を決めて、支援していくことが重要！**

(1) チーム支援会議の必要性

不登校児を支援しようとする人が、それぞれに自分の思いだけでかかると、支援がばらばらになり、それぞれが一生懸命やっても効果が出ない。ともすると、共通性のない支援で、不登校児が混乱し、動けなくなってしまうこともある。このようなことから、かわる人たちが情報を出し合い、「今、不登校児にどんな支援が必要か」共通の目標をもってかわることが必要である。そのような場として、チーム支援会議を設定する必要があると考える。また、チーム支援会議において、支援する不登校児にかかわる情報からその子を理解し、共通の支援目標を立て、チームのメンバーがそれぞれに「自分にできる支援は何か？」具体的な支援案を考えることが大切である。そして、チーム支援では、それぞれ支援者が不登校児にかかわり、アセスメントし、支援案を設定し、具体的に実践し、その結果を評価・検討し、修正支援案を立てて、実践するという円環的な問題解決を行うことが必要であると考える。

(2) 共通の支援目標を決定することが大切

チーム支援会議で、不登校児の思いを受け止めて、焦らず、不登校児に寄り添ってスモールステップで共通の支援目標を決めることが大切である。次に示すような点が、不登校児の思いを受け止めたり、支援目標を決めたりする上でポイントになると考える。

- 本人の心の安定を図る人や場・時間を考える。
- 本人の思いを大切にし、スモールステップで支援を考えていく。
- 本人が意志決定する場を多く設定していく。
- 教室など本人の周りの環境を整えていく。

不登校児の状態に応じて、図2に示すような不登校児に寄り添ったステップアップの支援目標が考えられる。また、チーム支援会議を行えない場合は、次のような情報交換の場や方法の工夫が必要と考える。

(3) いつでも・どこでも情報交換：休み時間にできるチーム支援会議

チーム支援会議が、定期的に行えなかったり、不登校児の変容から、急に情報の共有や支援の変更が必要な時が出てくる。そんな時は、よく教師が、職員室に戻ってきて、授業の様子、生徒とかかわった様子などを話し合っているが、そのような情報交換の場をもつということである。不登校児や保護者を支援する人が、自分でよいと思って行った支援も、実は相手にとってプレッシャーになったり、今の状態では無理なことだったりすることがある。その支援後の反応をキャッチしないまま、自分のよいと思う支援を繰り返せば、かえって、相手を苦しめることになってしまう。このようなことから、チーム支援会議を行う時間がなくても、支援中や支援後の反応をつかむことが非常に重要だと考える。そして、休み時間等、少しの時間でも情報交換を行うことが大切である。そして、そのとき情報交換するポイントは次に示すようなものである。

休み時間にできるチーム支援会議のポイント

- どんな支援に対して、子どもがどのような反応を示したのか確認する。**
- 支援目標を変更する必要があるかどうか検討する。**
- チーム支援のメンバーの具体的支援について変更の必要があるかどうか検討する。**
- 必要ならばチーム支援会議の日時を決める。**

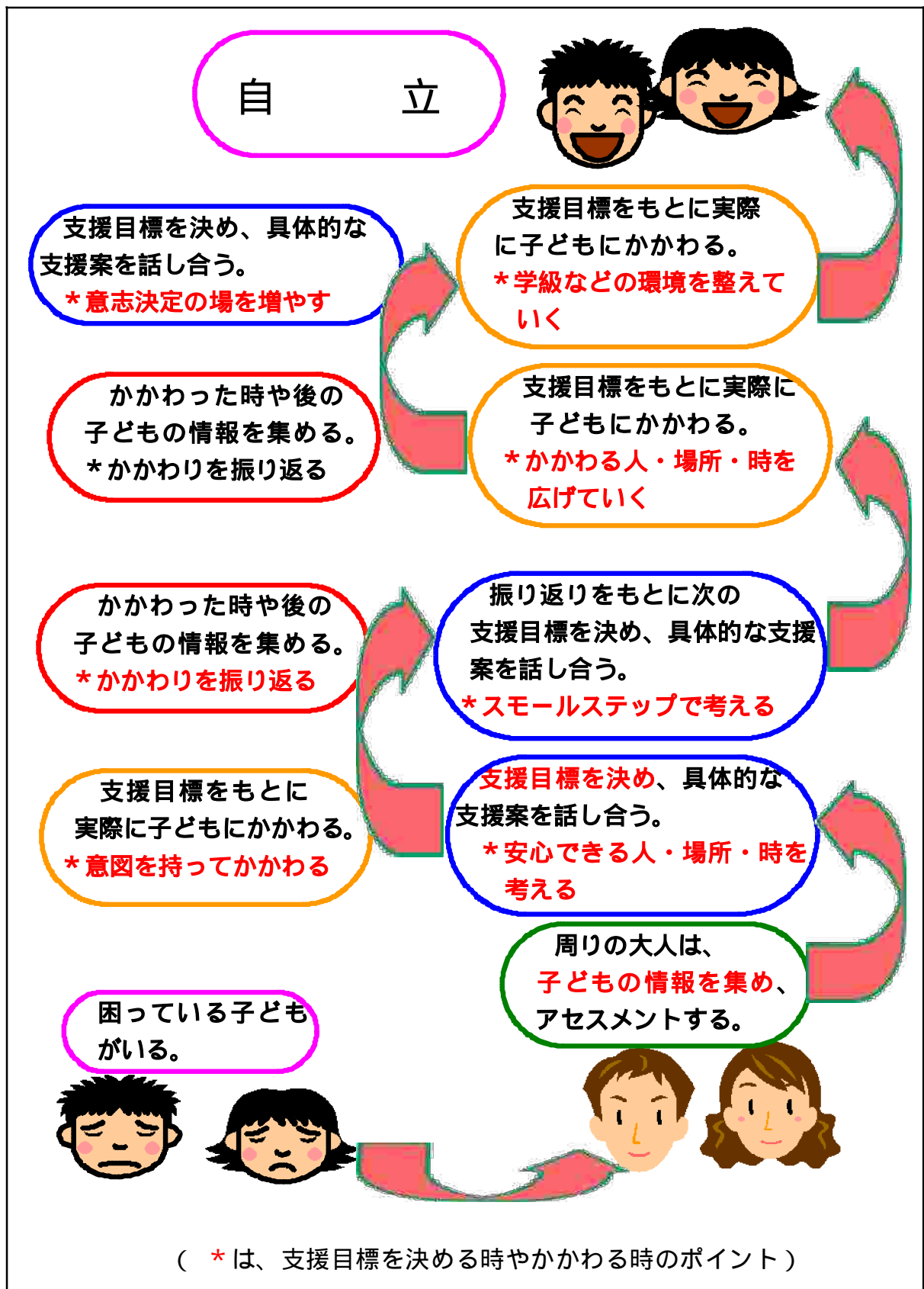


図2 子どもに寄り添いながらステップアップしていく支援目標

(1) コーディネーターの必要性

チームとして組織的に支援を進める上で、「組織を機能させる役割をもつ存在が必要となる。それがコーディネーターである。」(2004 奥山)とあり、校内支援体制という組織的な支援を行うときには、コーディネーターの存在が不可欠になると考える。また、コーディネーターは、一つの組織に一人というのではなく、不登校児を支援する各チームにそれぞれ異なるコーディネーターが存在した方がよいと考える。また、機能している組織には、コーディネーターの必要はなく、問題解決を組織で繰り返すことで、誰もがコーディネーターの役割を果たせるようになると思う。そして、まだ組織が機能していない場合には(2)から(4)以下に示すように、コーディネーターを選定し、役割を意識して、組織の中で活動できる人の存在が必要になる。

(2) コーディネーターは、様々な人とのコミュニケーションが必要

コーディネーターは、不登校児や保護者にかかわることができ、担任などチームの他のメンバーと違ったかわりで情報を集められるとよいと考える。そのためにもコーディネーターとなる人は、日々いろいろな話題を気軽に話せる関係を周りの人とつくっておくことが大切である。そして、子どもたちや保護者とも自分から声をかけ、コミュニケーションをとっておくことが大切である。

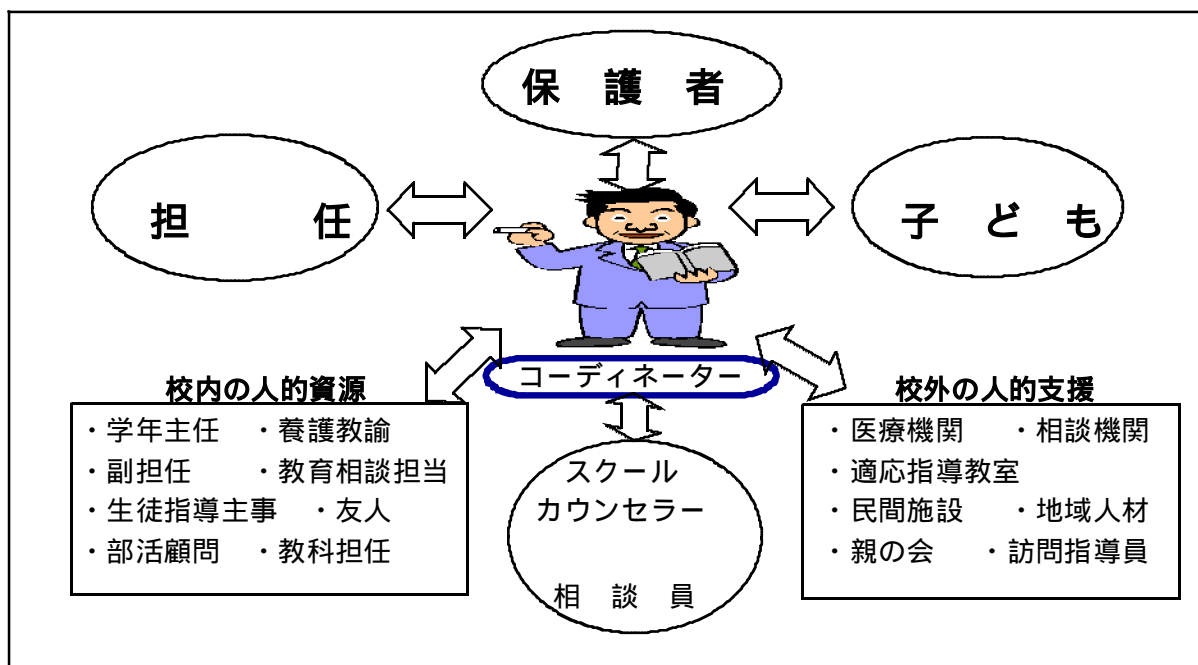


図3 様々な人とコミュニケーションが必要なコーディネーター

(3) コーディネーターの役割

○人や情報をつなぐこと

コーディネーターは、不登校児本人や支援を必要とする不登校児にかかわる人(担任、保護者、SC、養護教諭など)の情報をつなぐ。そして、チーム支援の共通目標や支援の状況を必要に応じて管理職や他の教職員に伝えたり、毎日勤務でないSCや相談員と情報交換し

たりすることが必要である。また、休み時間にチーム支援会議をすることができない場合は、それぞれ支援者は、コーディネーターに不登校児とかかわって得た情報を伝えておき、次に、不登校児にかかわる前にはコーディネーターのもとにある情報を聞いて、かかわっていくことが大切である。そうすることによって、不登校児に適切なかわりができる。そして、コーディネーターのもとに支援を記録する用紙を用意したり、パソコンの中に記録を入れておいたりするなど支援の記録を工夫するとより共通理解が深められると考える。

○協働意識を高めること

コーディネーターがチーム支援を進める上で、チームのメンバー全員で、不登校児の問題を解決して支援を考えていこうとする雰囲気を作ることが大切である。そして、このコーディネーターの問題解決の思考をもって、チーム支援会議を行うことによって、不登校児や保護者に寄り添った支援案が出されると考える。また、コーディネーターがチーム支援の状況について情報発信し、チーム以外の人たちにも協働意識をもってもらうことも必要である。

4 問題解決思考で支援を考えていく校内組織が必要！

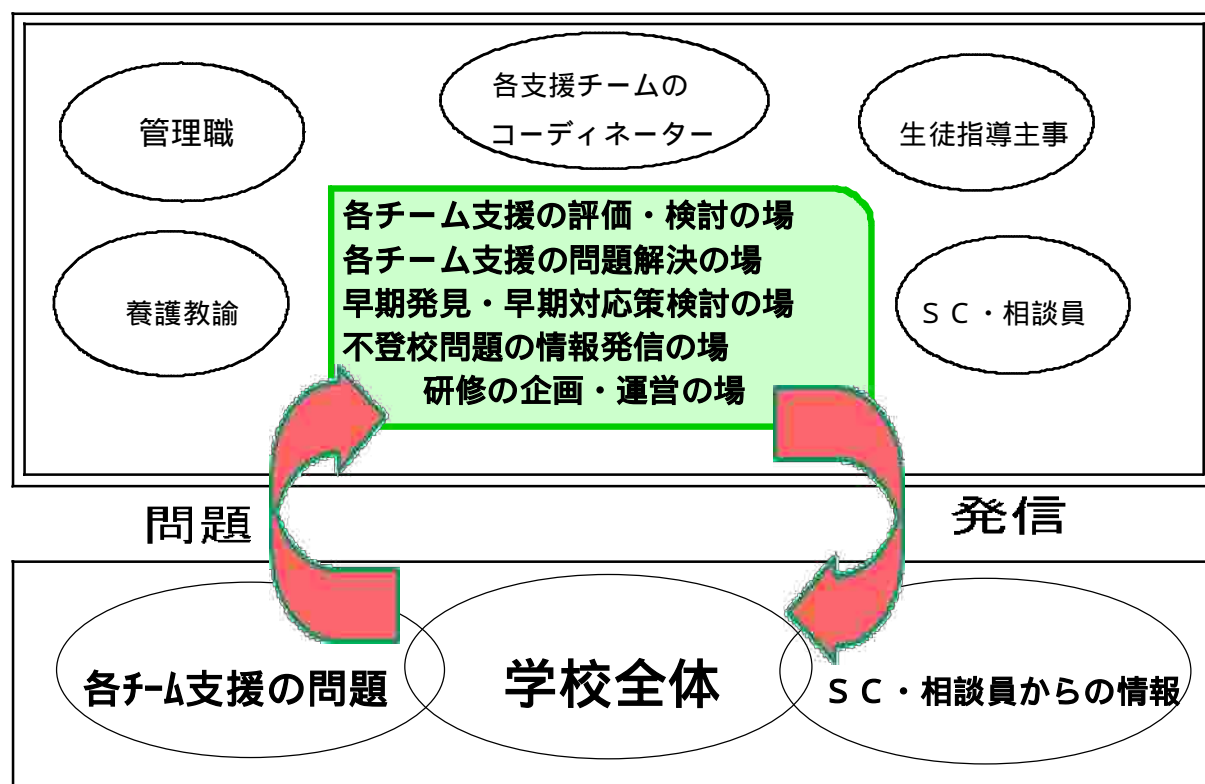


図4 問題解決の思考で支援を考える校内組織

それぞれの不登校児へおこなっているチーム支援を評価・検討する場が必要である。そこでは、それぞれのチーム同士が互いの支援を評価・検討したり、各チームのコーディネーターが、自分たちのチーム支援の問題などを挙げ、様々な立場の人たちから支援についてのアドバイスをもらったりする場が必要である。また、その組織が、各学年の教育相談担当、養護教諭・相談員・SCの報告をもとに、不登校傾向の早期発見や早期対応を検討する場になるとよいと考える。そして、その組織で報告された気になる子へアセスメントを行い、支援チームのメンバ

ーやコーディネーターの選定をおこなう場としても機能できるとよいと考える。

このように円環的な問題解決の思考で支援を考えていく組織を作ることが、各チーム支援を支え、より効果的なチーム支援ができるようになったり、不登校児の早期発見・早期対応が可能になったりする。この多様な機能をもつ場合は、今ある校内の組織、例えば生徒指導部会や教育相談部会をもとに考えていくことができる。そして、管理職も必ずこの会議に参加し、一緒に不登校児への支援について情報を共有し、協働意識をもつて実際に不登校児への支援について考え、かかわっていくことが大切である。また、SCや相談員が配置されていても教職員と情報交換する場や時間がないという問題点をこの組織やチーム支援にきちんと位置づけることで、教職員との協働意識を高めることができると思う。SCや相談員がこの組織やチーム支援に明確に位置づけられて協働していくことは、不登校児への心理的理解を深めることができ、教職員との連携が密になり、不登校児への効果的な支援につながると考える。

各チーム支援の評価・検討する時に下記に示す図5「コーディネーター会議シート」などを使用し、情報を共有して、他の教職員にも発信していけるとよいと考える。また、チーム支援会議では、下記に示す図6に示す「広げよう！支援の輪」のようなチーム支援会議シートシートなどを使って、支援の共通目標を決め、具体的な支援案を立て支援を行うことが大切である。そして、この組織から不登校児への情報を学校全体に発信していくことで、不登校児の支援についての協働意識が高まり、問題解決の思考をもつ学校風土を創ることができると思う。

不登校対策委員会資料		
コーディネーター会議シート		
平成 年 月 日		
支援チーム (コーディネーター)	支援チームの課題	今後の支援の方向性

図5 コーディネーター会議シート

チーム支援会議シート		
【	】への支援	広げよう！支援の輪
年 月 日		
第 [] 回の支援の共通目標		
【具体的支援と子どもの様子】		
いつ・ 誰が	支援内容	子どものその時の様子やその後の変容

図6 チーム支援会議シート

モデル構築後得られた概念

1 モデルプログラムの概念

相互コミュニケーションが高まり

問題解決の学校風土が生まれ、教師が変わり、子どもが変わる！

2 相互コミュニケーションの質的高まり

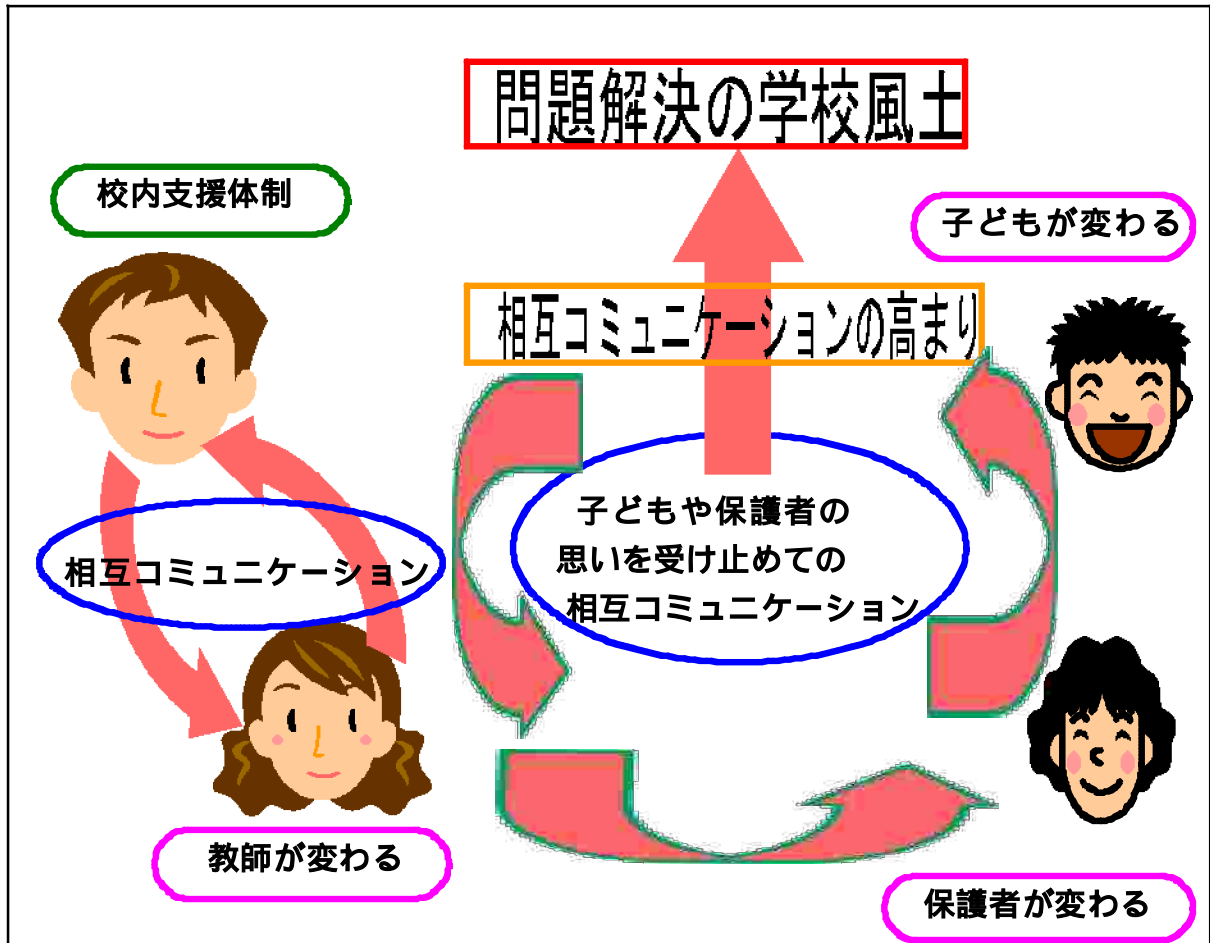


図7 相互コミュニケーションの質的高まり

相互コミュニケーションとは、一方的なコミュニケーションでなく、不登校児の背景や人間関係、置かれている状況に応じて、不登校児の考えや感情を理解し、不登校児に寄り添って臨機応変に対応するコミュニケーションである。それは、まず相手の声に耳を傾け、相手の思いを受け止め、相手の立場に立って自分の考えを伝えることである。チーム支援会議の中で、不登校児の支援者が、不登校児への情報を様々な立場から出し合い、話し合うことで、今までの自分の支援を振り返ったり、多様な具体的支援を考えたりすることができ、相互コミュニケーションの質が高まる。それによって、支援者は、不登校児への理解を深め、不登校児の立場に立ったかかわりをするようになる。そして、支援者の不登校児や保護者の立場に立ったかかわりによって保護者や不登校児にも変化が見えてくる。これは、相互コミュニケーションの質が高まることにより、相手の理解が深まり、信頼関係が強まり、共に問題を解決していこうとい

う協働意識が、学校と不登校児や保護者の間に生まれるからである。

3 問題解決の学校風土

学級担任一人の対応から、不登校児にかかわる人たちでチームを組んで支援を行う。そして、円環的に各チームの支援を評価・検討したり、問題解決について話し合ったりする機能的な組織を創る。このような機能的な組織の中で相互コミュニケーションが活発になり、不登校児にかかわる人々が、不登校問題に対して「自分にどんな支援ができるのか」という思考をもって不登校児にかかわるようになる。そして、支援者の相互コミュニケーションの質が高められ、他の教職員にもその相互コミュニケーションが広がり、学校全体の教職員が、協働意識をもって様々な問題を解決しようとすることによって、問題解決の学校風土が創られる。



図8 問題解決の学校風土

実践への提言

1 提言

円環的な問題解決の校内支援体制の確立が有効
～相互コミュニケーションが高まり、学校が変わり、子どもが変わる～

2 提言の実践に向けた基本的な考え方

不登校児や不登校傾向の児童生徒に対して、かかわれる人がチーム支援を組む。そのかかわれる人たちが、児童生徒の情報を出し合い、共通の支援目標を決め、それぞれの具体的な支援案を決めていく。そして、それぞれがその支援案に基づいて不登校児とかかわり、その結果を振り返ったり、検討したりして、次の支援につなげていく。このような円環的な問題解決の校内支援を行う中で、不登校児にかかわる人の相互コミュニケーションが活発になり、不登校児や保護者とかかわりが変化していく。それは、このような相互コミュニケーションの質の高まりによって、保護者や不登校児の思いを受け止めて支援者に「自分に何ができるのか」という問題解決の思考が生まれるからだと考える。

問題解決の思考をもつ支援者が、不登校児や保護者にかかわると、不登校児や保護者へその問題解決の思考が広がり、不登校児の自立を促進すると考える。また、このような問題解決の思考を持つ支援者が、不登校児だけでなく、学校のその他の児童生徒にかかわることで、学校全体のシステムが転換され、問題解決の学校風土が創られると考える。そして、そのような問題解決の学校風土が創られることは、不登校児の自立を促したり、不登校予防にも効果的であると考えられる。

3 学校復帰モデルプログラム構想図



図9 相互コミュニケーションの質の高まりによる問題解決の学校風土確立のモデル

4 円環的な問題解決の校内支援体制

チーム支援では、不登校児にかかわる人たちがチームを組み、不登校児に関する情報を出し合い、支援目標を決め、それぞれが具体的な支援案を考えていく。そして、その支援案に基づいて支援を行い、その振り返りをし、次の支援を検討していく。さらに、各チーム支援の評価を多くの人たちによってチームの編成や支援の方向性を検討する不登校対策委員会（コーディネーター会議）というような組織が必要である。不登校対策委員会のメンバーが、各チーム支援のコーディネーターの役割を担うことによって、不登校対策委員会の円環的な問題解決の思考が、各チーム支援に広がる。そして、各チーム支援の支援者がかかわる不登校児や保護者だけでなく、共に支援していく教職員にもその思考が広がっていく

このように各チーム支援会議や不登校対策委員会で円環的な問題解決の思考で支援を考えていく校内支援体制を確立することによって、そこにかかわる人たちが、問題解決の思考で不登校問題を捉えるようになる。そのチーム支援会議や不登校対策委員会において、円環的な問題解決の思考で話し合いを行うキーパーソンとして、各チーム支援のコーディネーターと異なるこの会議におけるコーディネーターが必要になる。

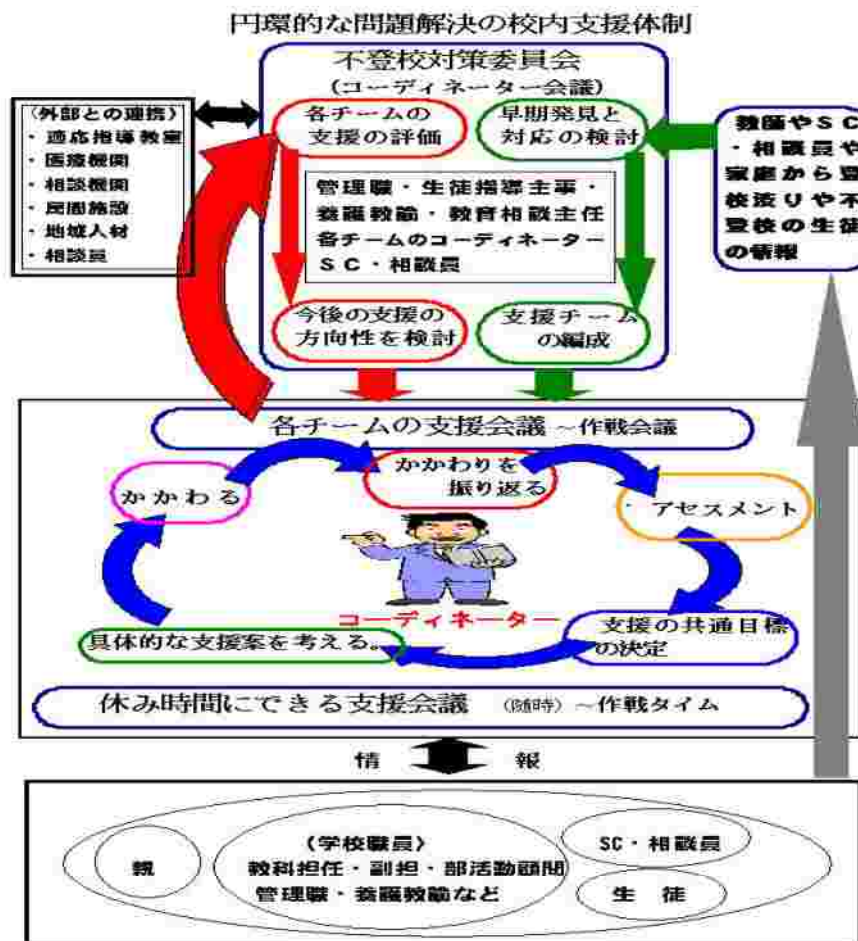


図10 円環的な問題解決の校内支援体制モデル

研究のまとめと今後の課題

1 まとめ

- 不登校児の支援者が集まり、情報を共有し、自分たちにどんな支援ができるかを考える「円環的な問題解決の思考」で支援を考えることを繰り返す。このような校内支援体制を確立することによって、そこには相互コミュニケーションの質的高まりがみられ、不登校児の支援者が自分の枠組みを柔軟にし、不登校問題を自分たちの問題として捉えるようになる。そして、このように変容した不登校児の支援者が、それぞれ問題解決の思考をもって不登校児や保護者に接することにより、不登校児や保護者の中にも問題解決の思考が生まれ、自立へと歩み出すようになっていくと考える。
- 円環的な問題解決の思考が身に付いた支援者の変容は、不登校児やその保護者だけでなく、共に支援していく教職員やＳＣ・相談員に広がり、それぞれの変容につながっていく。そして、支援者となる教職員同士や教職員とＳＣや相談員が、いつでもどこでも情報交換を活発に行うようになり、相互コミュニケーションの質的高まりが生じる。この高まりが不登校児への支援だけでなく、他の子どもたちへのかかわりにも広がり、日常の学校生活や授業場面が変わる。このような相互コミュニケーションの質的高まりが学校全体に広がり、システムが転換し、問題解決の学校風土が生まれるようになっていくと考える。
- 円環的な問題解決の思考が身に付いた支援者が、コーディネーターとなり、各チーム支援を進めるキーパーソンになることによって、各チームの支援者も問題解決の思考で支援を考えていくようになる。そして、各チームの支援者の変容が、共に支援していく教職員に広がり、誰もがコーディネーターの役割が担える人へと変容し、学校組織が機能的なものになると考える。また、コーディネーターを育成するためには、学校全体で研修を行うことが有効になる。そのためには、管理職が学校全体で不登校問題を考えていこうという姿勢をもち、不登校問題の捉え方やチーム支援会議の研修を行う場を設定することが大切である。そして、校内支援体制の確立の中で円環的な問題解決の思考を繰り返すことによって、不登校問題を解決できる機能的な組織が創られる。

2 課題

- 学校全体で校内支援体制を考えていく上で、それを推進していく人（管理職・生徒指導主任・教育相談担当・養護教諭・ＳＣ）の不登校問題のとらえ方やコーディネーターの役割についての研修が必要である。
- 円環的な問題解決の校内支援体制を確立することにより、学校全体のシステムが転換され、問題解決の学校風土が生まれる。教師が、不登校児から学んだかかわりを集団の中で生かせるよう、具体的な問題解決の教育課程のプログラムが必要である。

主な引用文献、参考文献

- ・石隈 利紀 著 『学校心理学』 誠信書房(1999)
- ・河合 伊六、桜井 久仁子 著 『不登校 再登校の支援』 ナカニシヤ出版(2000)
- ・田上 不二夫 著 『実践スクール・カウンセリング』 金子書房(2000)
- ・吉川 悟 編 『システム論からみた学校臨床』 金剛出版(2003)
- ・奥山・懸川 『適応指導教室をフィールドとした学校復帰モデルの試作』
(群馬県総合教育センター 長期研修員 報告集 211 集、2004)
- ・齋藤・住谷 『組織的「チーム援助」を展開する不登校復帰モデルの研究』
(群馬県総合教育センター 長期研修員 報告集 211 集、2004)